

# 魔導士の軌跡

柊憂

## 【注意事項】

このPDFファイルは「ハーメルン」で掲載中の作品を自動的にPDF化したものです。

小説の作者、「ハーメルン」の運営者に無断でPDFファイル及び作品を引用の範囲を超える形で転載・改変・再配布・販売することを禁じます。

## 【あらすじ】

この小説は、Fateをはじめとした沢山の作品からネタなどを拾ってきています。それは多岐にわたり、今となってはどの作品だったかも忘れてしまっています。

登場人物はすべてオリジナルとなっています。また、小難しい用語が出てきたりしますがそれらは一切と言っていいほど解説いたしません。ですが作中にてなるべく解説を入れようと思います。読みたくないという方はブラウザバックだけシカシ。

スペシャルさんくす!!!

一式陸攻様

夢幻様

多分、このサイトにはいらっしやらないと思いますが、このお二方なしには出来な  
かった小説です！本当にありがとうございます！！

うん、今気付いた。これあらずじじやないね…。(またかよ)

# 目次

死の契約	ハーデス	1
十六夜の決戦	Dawning	
blue VS Scarlet		9

～  
死の契約 ハーデス  
～

人間ごときの魔導士がどれほどの魔力を持っていたとしても、我々死神に勝つということは一にも有り得ない。然したる要素としては体の作り。魔法が及ぼす体へのダメージを防ぐ抗体のような存在を我々は生まれた時点から身につけている。他にも、人間とは比べ物にならないほどの圧倒的な魔力をも身につけているからだ。だが、私の統治する国を攻撃している者は違った。いや、見誤ったと言っているからだろう。人間は恐れながらもその知能を生かし、魔力を極限まで高める呪いを編み出していたのだ。彼奴の魔力を侮ってはならない。それはほぼ無限。私がたどり着けなかつた至高の頂を、彼の者はすでに身につけていた。

「星が！星が降ってきます!!」

星：確かに外を見遣れば星が降っている。だがそれは星ではない。私も永いこと生きてきたが『それ』を見るのは初めてだった。

『最強魔法、レイ・サウザンド』

衛星軌道上に絶大な魔力を持った魔法陣を描き、あたかも星が降ってくるかの如く魔

力の塊を地上に落とす最強の対界魔法。使用するには何百人もの大魔導士と呼ばれる者が集まり、数週間の下準備を経て漸く発動できるほどの大掛かりな魔法。だがそれをたった一人、しかも数秒で彼奴は発動させた。悪夢とでも言うべきか：それは今まさに私の国と同胞を焼き尽くしていた。響く轟音、弾ける閃光……。5000年もの永きに渡りこの国を治めてきたが、それがまさかたった一人の力により、たった一晩で崩壊しようとは。それゆえ悪夢。

「敵の人数は一人！宮殿へまっすぐに向かって来ます!!」

「斯衛このえと準死青天しせいてんを出せ、時間稼このえぎにはなるだろう……」

「はっ!」

そう長くは持たないことなど百も承知。もうどうする事も出来ない未来に、私は少しでも近づきたくなかったからだ。死神になり、初めて味わう恐怖。それがよもや自身の国の崩壊とは誰が予想しえたことだろうか……。

「父上」

「申せ」

「私もあの者達と共に戦いとうございます」

「……。敵が持っている剣がなんだか分かるか」

「はっ、聖剣にございます」

「死神が聖剣に切られればどうなるか、そちも知っておろう」

「…傷は癒えず、二度と元に戻らないと」

「ここに居ろ」

「しかし父上!!」

もはや策どころではない以上、無言で息子を見つめた。強き力が圧倒的に強き力に敗れ去るのだ。

「敵、城門を突破!は、速い!このままでは」

「…死青天を出せ。もはやそれしか部隊は残っておらぬ」

するとどうであろう、息子は防具をきつく締め直し、扉へと向かい始めたのだ。

「父上…、御命令に背く事をお許し下さい」

「なっ!ま」

『待て』と言うその刹那。耳をつんざく程の轟音が上がり、扉が壁もろとも破壊されたのだ。

「ぐうっ!」

「何事だ!?!」

見れば、壊れた扉の所に、それは美しく見事なまでに磨き上げられた漆黒の剣を携え、そのまま夜の星空に溶けてしまいそうなほどの煌びやかな瑠璃の甲冑に身を包んだ青

年が立っていた。

「なっ…300人も居た死青天を…」

背後には死体、いや、抜け殻がゴミのように積まれていた。それが我が国最強の死青天部隊だったとはもう微塵にも思えない。2300年ほど前、天界との戦で活躍した最強の部隊がたった一人に…。もう何度目かになる、夢ならば覚めてほしいと、私はそれを見ながら思った。

「くっ、よくも仲間を！死…かはっ！」

先程まで物見をしていた同胞が近づいただけで事切れた。全くもって意味が分からない。死神に強さの限界があるならば、この者は間違いなくそれを突破しているだろう。鋭過ぎる眼光はまるで他に誰も居ないかのように、ただ私だけを見ていた。

「我が名はディアブロ・ハーデス・シュトラウス！貴殿と勝負願いたい!!」

「やめ…」

私はやめろと言いたかった。だが声が出ない。今まさに死に行こうとしている息子を私は見る事しか出来ないのだ。声を聞いた奴は鋭い眼光を私ではなく息子へと変えた。

剣を抜く息子。それを見た奴は、剣の切っ先を息子へと向け言い放った。

「我が名はシルヴィ・ラインハルト。御首、頂戴仕る」



「……参る、でやあ!!」

飛び掛かるかのようにシルヴィという青年に突っ込む息子。決して筋は悪くない、突くように動かしした剣をくるりと返し、首の所で真一文字に払う。しかしあたるどころか掠りもしない。人間には見えるはずのない速さで繰り出したそれを奴は『見切つて』いたのだ。我が息子も甘かった。それで首が取れたと思つてしまつたのだろう。攻撃を一瞬、たつた一瞬止めてしまつたのだ。その隙をシルヴィは見逃さなかつた。

キーン!!

耳に残る甲高い音。シルヴィは動いていない。が、確かに動いたそれは息子の防具を容易く切断していたのだ。

「なっ!」

オリハルコンで出来ている防具が一部切断され、何が起きたか分からず固まる息子。シルヴィの反撃は留まることを知らない。

「や、やめ……」

キーンという甲高い音を発しながら『見えぬ』可視の剣をふるうシルヴィ。もはやその攻撃は一本の鋭い『線』。死神の速度を遥かに上回つたそれはまさに絶対神の領域であつた……。

「もう……い……やめ……」

言葉にならない声が漏れる。シルヴィの『線』を防ぐことすらままならない私の息子は、すでにぼろぼろであった。そして私はどうとう息子の最期を見る。

スッ！

音はしなかった。いや、聞こえなかったというべきだろう。すべての音がその瞬間だけ私の耳には届かなかった。だが血飛沫を散らせながら匆ね飛ぶ息子の首だけがすべてを物語っていた。『線』ではなく『点』。線すら見切ることの出来なかった息子にそれを遙かに上回る『点』を見切ることなど不可能であった。

「もう……やめてくれ……」

ようやく声がまともに出た時にはすべて終わっていた。彼は鋭い眼光のままこちらを見据えている。徐々に差を縮められながら、私はいつの間にか膝をついていることに気が付く。全くと云っていいほど力が入らない。彼の魔法の所為ではない。精神が崩れた、それだけのことだ…。

「…」

「選べ」

彼の持つ剣の切っ先が、膝をついて大理石の床を見つめる我が頭に向けられているのが分かる。

「…」

「今すぐ死ぬか、私のサーヴァントになるか選べ」

「…」

圧倒的に前者を選びたかった。皆の元へ行けるのならそれでいい。

「後者を選べば死んだ者達は全て復活させると約束しよう」

「…なぜこんな事をするのかね…」

「…答える義務は無い」

「そうか…」

全て分かった。死んだ者達を復活させる理由、それはこれから大量の人間を殺しに行くこと、つまりこの者は戦争をしに行くのだ。それも並大抵の戦争ではない。大戦と呼ばれる魔界全てを巻き込む戦争を起こすのであろう。我々死神ですらも『魂』を持っている。つまり死んだ人の魂を媒体にし、死神を蘇らせるつもりなのだ。

「…する…」

「聞こえぬ!」

「契約する…」

「私のサーヴァントになるのだな」

私は頷いた。王たる私が辱められ、皆が蘇るならそれでいい。その為ならばこの者の新たな剣となり、共に世界を駆けようではないか。

「ならば……話しは早い」

ぼんやりと見上げ、跪いている私の肩に剣の切っ先を置いた彼はそのまま私の眼をその鋭い眼光で捉えていた。

「……我は光にて罪を償い、闇を以て罰を刻み、死の契約によりて汝ハーデスをサーヴァントとして迎え入れる。汝は我が僕（しもべ）なり、我に罪深き闇より永久に輝く死の力を示せ！」

「仰せの……ままに……」

死の契約 完

S  
十六夜の決戦    Dawning blue    VS  
Scarlet    S

十六夜……。それは夜明けと共に現れた悪魔だった。単騎……いや、確かに倒すべき人間は一人。だが彼奴の周りには人間ならぬ者が蠢いていた。そう……それは夏の夜。私が魔界を統一せんと軍を率いていた頃。魔導という名の馬鹿げた力を使う蒼き悪魔の騎士と初めて一戦交えた夜だった。払った代償は、今も私の中に生き続けている……。

魔導士の軌跡

『夜明けの蒼 VS 深紅の魔女』

私は將軍としてこの軍に身を置いていた。どういう経緯でこうなったかは覚えていない。だが一つ、一つだけ掲げていたものがあつた。それは……

## 『魔界征服』

皆には魔界統一等と偽りの事を言っていたが、真の目的は征服である。この世界を手中に収める。それが私の夢だったのだから。

## 十四夜…

いい夜だった。月が出ている上に夏特有の暑さもない。皆で祝杯をあげるのには持つてこいの状況だった。それぞれが先の戦での勝利を祝い、酒を酌み交わしている。無論私も論外ではない。透き通ったグラスには白ワインが注がれ、そのたゆたう水面には私の紅き瞳が映っている。

スカーレットデビル…。限界以上の魔力を放出した時のみに現れる現象。瞳の色が深紅に染まり、数分もすれば魔力に耐えられなくなった身体が崩壊するという恐ろしい症状…。だが私は生まれた時からこの状態だった。どんな医者に診てもらっても首を

捻るばかり。『そういう』家系でもないのに私は魔力が他の者に比べて抜きん出ている。こんな人間、私以外誰も居るはずがない、そう思っていたのに…。

ある時私は一人の騎士に出会った。名をリーフと言う名家の騎士だった。彼の魔力は当時の私の魔力を軽く凌いでいた。つくづく世界の広さを思い知らされる。その時私は彼に持ちかけた。

「魔界を統一しないか？」

勿論、断られた。軽く30分ほど『騎士』とは何かを喋りまくった揚句に用事があるとかいって私の前から去っていったのだ。本当につくづく面白い世界である。

…そのリーフも何者かによつて殺された。もう一年近く経とうか。彼の死に場所には巨大なクレーターがぼつかりと口を開いていた。あんな魔法、見たことがない。上には上がいる。井の中の蛙だった私を奮いあがらせた出来事だった。

先日の勝利の美酒に酔いしれていると参謀から連絡が入った。どうやら緊急を要するらしい。私はグラスを置き、参謀本部がおかれているテントへと足を運んだ。まさかこの後、酔いがすっかり醒めてしまうほどの驚愕の事実を知ることになるうとは思ひもしなかった…。

「なんだって!？」

私は大声を出していた。

「情報は確かです。死界へ送った使者によると、すでに数カ月は経過しているとの報告でした」

「バカ者! 数カ月前の情報をどうして入手できなかったんだ!」

「死界と魔界との国交は既に断絶されており、ゲートすら封鎖の状況。天界から強制的に死界側ゲートをこじ開けるのにそれなりの時間を要しましたので」

「くっ! 結局、後手後手か」

私は驚愕した。つい、いやもう数カ月前の出来事である。死界が何者かによって襲撃されハーデスの統治する国が滅んでいたのだ。死神の力は私も十分知っている。たった一人相手にするだけでどれだけの犠牲を払わなければならないだろうか。それほどまでに危険な存在なのだ。だからこそこちらから使者を送り、我々の仲間にしようとしていたのだ。

「報告によれば一晩で崩壊したのではないかと…」

「一晩!? あはっはっは! 無理だよジャミル君、我々でも3年は掛かる。……それも確実に寸断されることのない補給線と軍全員分の聖剣、読まれる事のない暗号に作戦があつての話しだ」



後半は手振りを交えて至極真面目な顔で話したつもりだったがジャミルは続けた。

「微妙ではありませんが、古代魔法を使用した形跡があると」

「恐らくそれは死神だ。生きた人間で使える奴は知らん、居ないと言ってもいい。ふん、デス閣下も自国内で禁忌を犯したか。そうだろうな、どれだけの数で死界に攻め入ったのかは分からないが、相当数で挑んだのだろう。まあいい。魔界といえど広い、私の知らぬ軍勢など沢山居るだろう。それより、せいづらはどうやって死界に入ったんだ？」

至極真つ当な質問を投げかけた。何故なら先程も言った通り、ゲートは完全に封鎖され、蟻一匹通れないようになっていたのだから。

「わかりません」

「はっ?」

思わず素つ頓狂な声を出してしまった。：直属の部下には聞かせられないな。

「時空転位、若しくは次元転位魔法が挙げられますが詳しくは分かっているんです」

「どうしてだ? 大軍勢で死界に攻め入るのだから、ゲートか魔法かどちらかしかないじゃないか。しかもゲートは起動された形跡が無いんだろ?」

ジャミルは首を縦にこくこくと二度動かした。ふん、つくづく可愛い奴だ。

「だったら残るは魔法しかないじゃないか。一晩で死界を片付けられるほどの大軍勢を転位させたんだ、少しどころか相当の形跡はのこ」

『のこるはずだ』と最後まで言う前にジャミルは口を挟んだ。

「これは私の勤ですが……。恐らく少数で攻め入ったのではないでしょう。それも恐ろしく魔力があり、至高の聖剣を扱える人物達。つまり」

「……リーフは死んだ。彼の一族も全てだ。……死人が蘇るなど……この事は誰にも話すな。モグラの方にもだ。分かったな」

「はっ！」

「今日はもう遅い、明日に備えもう休め」

私はジャミルにそう言うと言とテントを後にした。彼は参謀とはいえまだ若い。複数いる参謀の中で一番頭がキレるのも事実だが同時に一番危なっかしい奴でもある。将軍ともなると悩み事が一つや二つでは済まなくなるのだな……。

先程まで飲んでいた白ワインの事を急に思い出し、私は同胞と再び酒を酌み交わそうと焚火を囲ってある先程のキャンプ周辺へと移動しようとしていた時だった。

「お困りのようですね」

「んっ？」

足元を見れば小さなモグラが私を見上げていた。

「小沢提督、夜遊びもほどほどに。体に障りますよ」

「おや？　こう見えても還暦にはなっていないのだがね？」

彼がジョークの通じる相手ではなかった。提督という立場にあるにも関わらず、戦場では前線に赴いて敵を蹴散らし、休暇となれば一般兵士に交じって酒を酌み交わし、ジョークで場を和ますキャラなのだ。彼はモグラ。私がクレーター付近で見つけた友だ。彼らもまた戦争という名の殺し合いを憎んでいた。だから私はあえて彼らをこの『統一戦』に誘ったのである。だが統一戦といえど、所詮は戦争。殺し合いに変わりはない…。誰よりも胸を痛めているのは小沢提督自身であるのに、彼は私の言葉に頷き了承した。平和を勝ち取る為に戦争をする。それは多くの矛盾と多くの嘘を含んだ…。

「將軍、あまり考え過ぎぬよう。我々として何も考えておらぬ訳ではないのです」

「あなたはと思う、人を守る為に人を殺すのを…」

「…さあ、私はモグラですからね。人が考えた事柄は人が答えを出すべきです。しかし…」

「しかし?」

「あえて言うならば……『春秋の花も紅葉も留まらず』ですな……………」

「……そうか……」

意味はよく分からなかった。

「明日は十五夜、明後日は十六夜です。我が国ではお祭りなんですよ。もし魔界が平和になるならば明日か明後日がいいですね。あつはつはつは!」

自慢のジョークで高笑いしながら一般兵の方へ向かっていく提督。私は下を向きただ立ち尽くしていた。酒の事が頭に過ぎったが、もうとてもそんな気にはなれなかった。…モグラ…。少し彼らについて考えを改めなければいけない。彼らは私なんかよりも、もつと真剣に平和について考えている、と…。